

「傷ついた語り手」概念から考える文学教育の可能性

雷 民 激

(2022年10月7日受理)

Possibilities for Literary Education from “The Wounded Narrator”

Lei Minlian

Abstract: Have we ever looked at our own bodies? In this paper, we visualize living two subjects at the same time, based on the fact that a person in pain and “wounded” lives on the edge (huchi) and is made to face multiple selves within himself/herself relative to his/her own body, just as a patient with chronic pain stands on the edge (huchi) of life and death. It also suggests the possibility of this work as a literary teaching material that considers the “wounded narrator” and his/her life with pain.

Key words: pain, the awareness of edge, narrator, learner

キーワード：痛み、縁意識、語り手、学習者

1. 語り手の語りと学習者の視点から見た現在の文学教育の課題

森 (2013) は「世界あるいは自身を全局的・メタ的に捉え直す対象化体験ではなく、それ以外の道を探ろうとするのはなぜか。それは教育現場において安易に対象化を進めることが、以下のような学習者を育む温床となっているのではないか、という反省からである。すなわち、当事者意識の希薄な、また出来事を形式的・表面的にのみ捉えて評価を下すような学習者である。(中略) 第三者的な立場や客観的な視点の獲得は、物事を判断する上で重要なことである。」(p.42) とした上で、学習者は、やはり「当事者」であることが重要であると述べる。「語られた世界に当事者として参入し、(中略) 物語の主体としての読者・学習者という視点でと、語る主体の欺瞞性という問題へのアプローチである。」(p.42) と主張している。

森は、学習者の文学体験において、作品の語る主体、すなわち、物語の語り手の語る行為に注目し、学習者は語り手が語ることに関わることを難波 (2007) が提

示した学習者の同化概念を踏まえ、当事者として語られた物語世界に参入することの重要性を述べたのである。

しかしながら、森論や難波論では、学習者が当事者性を背負うべき相手である語り手についての論及が不足している。学習者が背負うべき当事者性は、語り手の語りから生まれるが、では、なぜ語り手が語りたのか、なぜ、語りが生まれるのかという点についてはまだ明らかになっていない。

文学研究者である田中実は、語り手自身の語りに虚偽がある。したがって、語り手の虚偽性を克服するため、田中 (2018) は「<語り>自体を相対化する<語り>、二重の<語り>なくしてはありえません。作品の生身で登場する「物語」の書き手、すなわち、生身の<語り手>の<語り>の虚偽性の克服には<語り手を超えるもの> = <機能としての語り手> = 関係概念の<作者>が必要で」(田中他 p.74) と述べている。

こうして、田中は、文学作品の語り手自身が語る行為に注目し、読みの主体である学習者は、客体の作品の中に潜む<語り-語られ>を超える語り手を通して、<機能としての語り手>と同化する読みを求める。

本論文は、査読付き論文である。

田中の語り手論は、語り手の語りのみならず、語り手自身の語る行為そのものに着目しようとしている。とはいえ、ここでも、なぜ語り手が語りたいのか、なぜ、語りが生まれるのかについては明らかになっておらず、また、テキストに向き合う読者としての学習者は、どのように語り手と向き合うのか、どのように当事者性を背負うべきか、見えていない。

そもそも、文学の授業では、文学作品を語っている語り手がアプリオリに存在するため、学習者は、語り手の存在にはなかなか気づかず、また、ただ語り手の存在を気づくだけでは、語り手の精神状態を読めない。そうであるならば、田中(2021)¹が提示する「語り手」>に相関関係を越える「機能としての語り手」>に向かわせるにしても、どのように学習者を導かせるかが問われるべきであろう。

本論は、この問題を考えるための手がかりとして、慢性痛を抱える患者の世界観に注目する。また、慢性痛を抱える患者の身体と精神状態に応用し、「縁」というものの存在を説明する。これらの考察を通して、今まで注目されていなかった語り手の精神状態に注目できると考える。つまり、文学作品の語り手を「慢性痛を抱える患者」として見立てるのである。このことによって、語り手がなぜ語るのか、なぜ語りを作られてきたのかということを考えることができ、また、その語りを聞くことの国語教育としての意義を考えることにつながるのである。

雷(2019)では、難波(2007)が文学体験で「読者の分身」である「いつもの自分ではない自分」が生まれ、文学体験での出来事を対象化して現実の自分との葛藤を起こす学習者の姿を「典型化」と呼んだことを踏まえ、学習者が作品世界と現実世界に同時に生きることを、「縁意識」という概念で説明することで、これらの問題に取り組んでいた。

さらに雷(2020)は、自分自身の瀕死経験を振り返り、「縁意識」を更に深く分析し、「縁人間である人間にとっては、人間の思惟はただ、現実の世界のみならず、無意識の世界も同時に考える。したがって、「縁意識」の人間は周りから理解されない状態は逆に普遍的なことである。その結果、「縁意識」の考えでは、身体は現実の世界に生きると言う現実無力感が強くて目に見える世界は逆に生きる世界ではなく、無意識の世界こそが生きる道である。」(p.65)と提示した。

慢性痛の患者が生と死の「縁」に立つように、痛みを抱え「傷ついた」人間が「縁」に生き、自分の身体と相対しながら自己の中の複数の自己と向き合わせられるということを踏まえ、二つの主体を同時に生きることを可視化した。その上で、痛みを抱えて生きて

きたことを考えていく文学教材としての可能性を雷(2021)(2022)で示唆した。

本論文では、雷(2021)(2022)を踏まえ、文学作品の語り手はなぜ語り続けるのか、またその語ることや語りを聞くことが国語教育にとってどのような意味があるのかについて、「傷ついた語り手」と「縁意識」によって解明しようとするものであり、文学の授業において、学習者がどのような「在り方」をすることが重要かを示すことを目指すものである。

2. 研究の目的・方法

本論の目的は、①「慢性痛の痛み」から示唆される「傷ついた語り手」と言う概念を明確にし、なぜ語り続けるのかを明確に示すこと、②学習者の「縁意識」に気付かせる意義について考察することの2点である。そのため次の3つの方法を採用する。

- (1) 「縁意識」とは何かを説明する。
- (2) 筆者の慢性痛を抱える痛みの身体を説明し、「傷ついた語り手」と「縁意識」の関係性を説明する。
- (3) (1)と(2)を元に、「傷ついた語り手」を構造化し、文学教育の可能性と課題について考察する。

3. 「縁意識」と「慢性痛」

3.1 「縁意識」概念の投入

異なる言語の間に立つと、自己の主体が「代表化された自己」に抑圧されていることが認識できる。しかしながら、必ずしも多言語をさへ身につければ、複数の自己の存在を認識することができるようになるわけではない。言語を道具として使うのではなく、切実に自己の中の複数の自己と向き合わせるこそが問題である。難波(1999)、難波(2008)は人間の中の分裂する複数の自己の存在を明らかにしたが、その複数の自己がどのように互いを向き合わせるかということは論じていない。また、この問題は、複数言語話者とどまらない一方で、複数言語話者には際立つ問題として現れる。

複数の自己は、「代表化された自己」と同様に世界観を持っている。通常は「代表化された自己」とその世界観によって日常世界を人は生きているが、何か非日常的なことに遭うことによって、「代表化された自己」は日常世界とともに存在することが不可能になる。そのとき、日常的に抑圧された自己という「代表化されない自己」が日常世界に現れる。

ここにこそ、自己の中の複数の自己とどのように向き合わせるかという問題が見えてくる。すなわち、人

間の中には「代表化された自己」と「代表化されない自己」という複数の自己が存在するが、「私」自身は結局どれでもなく、それらの自己と自己のはざまに立つと言える。そのはざまとは一体どういうものなのか。これは、本論で言うところの人間の「縁」というものである。

この「縁」と言う概念は、魯迅研究者の鄭（2000）の論文に表れている。鄭（2000）によると、「縁」は物事の間、抽象と抽象の間、現実と現実の間、現実と虚妄の間だと説明できる。筆者の考えでは、「縁意識」は、抽象的な世界観であると考えられ、「縁意識」は単なる意識ではなく、世界観と考える。この考えに基づき、雷（2019）は「縁」というものは人間の意識に同時存在することを説明し、特に複数言語話者にとって、複数言語の間で、意識の「縁」が存在する。また、今生きる世界と死ぬ世界、つまり、生と死の間で浮遊する「縁」については雷（2020）では、自分自身の瀕死経験を振り返り、「縁意識」の存在を分析した。そして、「縁意識」が生まれる条件について雷（2022）では以下のように説明している。

「筆者には、縁の意識はどのように形成されているか。筆者は、持病であるパニック障害に遭い、正常の世界に生きる身体は薬に抑圧されている。しかしながら、薬を飲まないで、正常の世界に戻れなくなる。薬を飲む筆者と薬を飲まない筆者という二つの主体がある。その二つの間に立つ筆者は、いわゆる、縁に立っている。「縁意識」を持っている縁人間は何か（筆者の場合は、薬）によって生きることができる。一方で、その同じ何かに（筆者の場合は、薬）よって抑圧されて生きているのである。筆者自身を持病という側面から見た場合、言語とは異なり、逆に「代表化されている自己」は抑圧されている側なのである。このように考えると、「縁意識」が生まれてくるためには、「代表化されている自己」が抑圧する側でありまた抑圧される側でもあるという複雑な条件が必要なのかもしれない。」（p.17）

雷（2022）の考察をまとめると、「縁意識」の世界観は一つの自己の中に、二つの主体意識が同時に存在し、今現実の世界に生きている主体が抑圧する側でありまた抑圧される側でもある存在であるということである。

3.2 「痛み」と「慢性痛」

A. Frank は自著『傷ついた物語の語り手：身体・病い・論理』²⁾について、次のように述べる。

「本書は、痛む人々を傷ついた物語の語り手として

描き出そうとするものである。私は、病いについて支配的な文化観念が、受動的なもの—痛む人を病気の「犠牲者」、ケア受け手として捉える見方—から能動的なものへと移行することを願っている。痛む人は、病いを物語へと転じることによって、運命を経験へと変換する。身体を他の人々から引き離す病気が、物語の中では、互いに共有された傷つきやすさの中で身体を結びつける苦しみの絆となる。（中略）しかし、語ることは容易ではない。聴くことも同様である。重い病いを患う人々は、身体ばかりではなく、その声においてもまた傷ついている。人々は、病いとその治療とがしばしば奪い去っていく声を取り戻すために、物語の語り手とならなければならない。声は心を語り、精神を表出する。」（A. Frank 1995=2002: pp.3-4）

A. Frank によると、自分自身の傷ついた身体を語ることは、まず、傷ついた身体を聞き取らなければならない。傷ついた身体から求められる声を聞いた上で、自分自身を再認識する。では、どのように、傷ついた身体から求められる声が聞こえるのか。このことについて、自身もがん経験者であった A. Frank によって、病いを持つ患者が自分について述べた発話を幅広く収集し、それを「回復の物語」、「混沌の物語」、「探究の物語」の3つに類型化している。

そのうち、回復の物語のプロットには次のような基本的な筋書きが存在する。「昨日私は健康であった。今日私は病気である。しかし明日には再び健康になるであろう。」（p.114）しかし、ここで「回復の語り」には限界がある。「回復の物語は、人が死を迎えつつある時、あるいは障害が慢性的に残ってしまう時には、もはや役に立たない。回復がもたされない時には、他の物語が準備されなければならない、さもなければ語りの難破が現実のものになってしまうのである。」（p.135）と述べている。

このことについて、河野（2014）では、次のように述べられている。

「痛みは、この身体と世界の間を逆転させてしまう、痛みは、自己身体が対象となった経験であり、私は痛んでいる身体に意識を絡め取られてしまう。あまりに激しい痛みでは、他のことを考えられなくなってしまふことはもちろんだが、それほど強くなくても、痛みは緊急サイレンのように私たちの意識を支配する。損傷箇所と痛みが一致している急性痛であれば、損傷箇所への手当ては痛みを和らげる。しかし、慢性痛は幽霊のようにつきまとう。」（pp.76-77）

A. Frank が提示する「回復の物語」と河野の読みを合わせて考えてみると、正常の身体を持っている人間は自己の身体に目が向いていない。身体に何か痛みが出る時に、はじめて身体に目を向ける。痛みなしの身体は正常の世界、痛みをもつ身体は不常の世界である。したがって、痛みによって、身体と世界の間隔が変わっていく。正常の世界から不常の世界に通い続けるのである。一方で、「回復の語り」では、現代の医療技術によって、痛みなしの正常の世界に回復していくのである。

しかし、「回復の語り」は、急性痛と慢性痛と異なる。急性痛は現代の医療技術を行えば、痛みが我々身体を支配できなくなって、回復する。しかし、慢性痛に遭ったら、いつ死に至るのか予測不能になり、慢性痛に支配されて永遠に正常の世界に戻れなく、回復できないという限界がある。慢性痛を抱えた患者は、病いとその治療によって、主体の声が奪われているため、自分自身の精神を表出しにくくなるのである。

3.3 「慢性痛」の患者と「混沌の語り」

慢性痛について河野（2014）は次のように述べる。

「痛みが、損傷箇所からのサインにすぎないとすれば、慢性痛とは単に偽の痛みにすぎないことによる。しかし、慢性痛は発病ではなく、確かに痛む。他方で、同じ程度の損傷でも、人間関係や、社会の文脈によって、異なった強度や性質の痛みとして感じられる。痛みは心理的である。というのも、慢性痛を和らげるのは、薬を投与する神経医学ではなく、むしろ、精神科医や心理カウンセラーだからである。痛みとは、内的感覚ではなく、身体の部位の損傷によって開始する反応と行動の複合体である。痛みは、確かに、有害な状況のもとで、自己を保護しようとする生理的な反応として始まる。しかしそれは痛みの最初のフェーズにすぎない。その最初の損傷状態から回復し、治癒するまでにいたる一連の反応と行動の全過程こそが、痛みなのである。」（pp.75-76）

このような限界にいる患者を、A. Frank は「混沌の語り」と呼んでいる。

ここで、一人の慢性痛患者を事例として、その身体／意識構造を分析する。

この二つの世界を同時に生きている。慢性痛患者には、（薬で）生きている現実的な自己と（薬無しで）死んでいる「自己」が現れる。慢性痛の患者はこの二つの自己を持っている。また、薬無しで死んでしまう「自己」が抑圧されると同時に、薬で生きている自己

をこの「自己」が抑圧している、という二つのリアリティ性を持っている

一方で、慢性痛の患者は、この二つの自己を持っていることとともに、薬無しで死んでしまう「本来の自己」が抑圧されると同時に、薬で生きている自己（言わば、現実に痛みを持つ身体）が意識的に、身体の中で行われる慢性痛の身体構造を抑圧していることが共存している。だからこそ薬を飲んでいる身体が相対化されてしまう。

このように、A. Frank は次のように述べている。

「物語は、傷口の縁をなぞり、ただその周囲を語ってまわることしかできない。言葉は痛みを生々しさをほめかすものの、傷はまさに身体のものとしてあり、その屈辱と不安と喪失感を言葉は決して捉えることができない。」（p.140）

いわゆる、慢性痛の患者にとっては、一つの自己は一つの身体に現れる。しかし、慢性痛を抱えることで、もう一つの自己が出てくる。そこで、自己が何か（例えばもう一つの自己）に抑圧されていることもわからないまま抑圧されていること<意識>を感じなかったら、慢性痛を抱える身体を対象化することができない、ただ、痛みを持っている身体、薬に抑圧されていると感じている一方である。したがって、慢性痛に遭った人間は正常人間のように正常の世界に生きていると同時に、非正常、つまり、痛みの世界に生きているからである。という混沌を、言語化されないが、慢性痛の患者は実感している。このような混沌があると、自分自身の声を聞けなくなる。

この難問について、A. Frank は次のように、述べている。

「聴くことが困難なのは、聴き手が語られている事柄を、容易には自分自身の生の可能性または現実として受け止めえないということだけによるものではない。同時に、混沌の語り、傷口の縁で語れているのだとすれば、それはまた発せられた言葉の縁の上で語られているものでもある。つまり、混沌とは、言葉が見通すことも照らしだすこともできない沈黙の中で語られるのである。混沌の語りは常に語られた言葉を越えて存在する。したがって、それは、語られた言葉の中には常に欠落している。混沌は、決して語ることでできないものであり、語りの中に穿たれた穴である。」（p.145）

A. Frank の考えに基づく、慢性痛のような傷に

遭うと、いつ死に至るか予知できなくなり、痛みに支配されて永遠に正常の世界に戻れなくなる。たしかに、慢性痛の患者は現代医療の治療によってなんとか生きられる。しかし、治療によって生かされているのはすでに「本来の自己」ではなくなっているということである。この慢性痛患者の矛盾が、A. Frank が言う「混沌の語り」を生み出すと考える。

このように、慢性痛の患者のような語り手を、A. Frank は「傷ついた物語の語り手」と呼んだのであった。

ここで、筆者の事例を述べる。筆者は、リアルな慢性痛を抱えている。また、パニック障害を抱えている。一方、筆者は日本語と中国語の二言語話者である。筆者は薬を飲んで生きながらえている自己は「本来の自己」を強く抑圧し、ときにパニックを引き起こし、瀕死状況を幾度も経験した。この時、中国語話者としての筆者はまさしく「混沌の語り」に生きている。

しかしながら、言語の環境を変えると、変化が起きる。パニックが発生した瀕死体験は中国語という語圏の下で起きた。パニックが発生した瀕死体験は中国語の思惟主体で行われた。日本語の語圏に入ると、新しい主体、つまり、日本語の思惟主体がしだいに強くなる。その結果、別の言語思惟によって、新しい主体が作られていく。ずっと抑圧されている「本来の自己」を少しずつ取り戻すことができると同時に、瀕死体験を抑制することもできるようになったのである。すなわち、異なる言語世界で生きる筆者は、母国であった慢性痛によって内部から崩されてしまった自己の存在を明確に意識した。筆者の場合は、内部から崩されてしまった自己の存在は「本来の自己」を抑圧しているのである。

「傷ついた語り手」の内部から崩されてしまった自己を、認識するため、あるいは、慢性痛で、奪われた声をどのように新たに、聞けるようになるかについて、A. Frank は以下のように述べる。

「混沌の物語の語り手は、まぎれもなく傷ついた物語の語り手である。しかし、本当の混沌を現に生きている人々は言葉によって語るができない。混沌を言語化された物語へと転換させるということは、それを何らかの形で反省的に把握するということである。物語の中で語ることでできる混沌は、すでに距離を置いて位置付けられており、回顧的に反省されている。自分自身の生に対するそうした反省的把握を行おうとする人にとって、距離を取るということは不可欠の条件である。(中略) 混沌の語りを生きている人は、自らの生に対して距離を取ること、それを反省的に把

握することもできない。生きられている混沌が、反省を、したがってまた物語の語りを不可能にするのである。」(pp.140-141)

すなわち、「慢性痛の患者」は、慢性痛の病を受け入れることで、自分の身体と相對しながら自己の中の複数の自己と向き合い、意識するためには、この構造を對象化する必要があるが、對象化のためには、言語化することが必要である。しかしそれは困難なことである。言い換えれば、内部から崩されてしまった自己の存在を言語化することは困難である。

この中にある、慢性痛の身体と「距離を取る」こと「反省的に把握できる」ことのためには、次に述べる「探究の物語」に移行しなければならない。

3.4 「傷ついた語り手」は「探究の物語」で生と死の「縁」を認識する

「探究の物語」について、A. Frank は、

「苦しみに真っ向から立ち向かおうとするものである。それは、病いを受け入れ、病いを利用しようとする。病いは探究へとつながる旅の機会である。何が探究されているのがすべて明確になることはない。しかし、経験を通じて何かを獲得されるのだという病む人の信念が、探究を成立させる。探究の語りは、病む人に、その人自身の物語の語り手として声を与える。」(p.163)

と述べている。

ここで、「傷ついた語り手」は病いを受け入れることで、自分の身体と相對するだけでなく、さらに、慢性痛の身体と距離を取ることで、病みの身体を對象化しながら、自己の中の複数の自己と向き合わせられ、二つの主体を同時に生きることが可視化することで、病いに奪われた声を改めて求めている。

ここで留意すべきなのは、「探究の物語」の中で、「傷ついた語り手」がどのように自己の中の複数の自己と向き合っているかを、A. Frank はまだ提示していないことである。

そこで本節では、「傷ついた語り手」がどのような世界観認識で、自分自身の傷ついた身体を改めて受け入れ、病いに奪われた声を聞けるようになるのかを「縁意識」で補足していきたい。

ここで問題にしたいのは、筆者は、異なる言語を使用することによって、パニックが引き起こす瀕死体験を抑制することができたという点である。

一つの自己は一つの身体に現れる。しかし、何が

あることで、もう一つの自己が出てくる。そこで、自己が何か（例えばもう一つの自己）に抑圧されていることもわからないまま抑圧されていることの<意識>を感じなかったら、「縁」に立つことはできない。ただ、痛みを持っている身体、薬に抑圧されていると感じる一方である。しかしながら、筆者は、異なる言語を使用することによって、パニックが引き起こす瀕死体験を抑制することができた。異なる言語を使用することで、自己が（痛み）何かに抑圧されていることを認識し、感じることによって、そこに、言語（語り）が生まれたのである。

したがって、慢性痛にかかることを意識するだけでは、精神状態は解放されるわけではなく、「縁」に立ち、異なる言語を使用することによってこそ、瀕死体験を抑制することができる、痛みを抑圧することができるのである。

筆者の考えでは、抑圧-抑圧され それ自体も抑圧しているというのは、自分の精神が「縁」に在ること、自分の身体を語るようになる行為である。すなわち、筆者の母語を中心とする中国語圏においてはパニック、死への恐怖感しなないにもかかわらず、日本語の思惟主体となることで、新しい主体が語られていくことで、（薬で）生きている現実的な自己と（薬無しで）死んでいる「自己」という傷ついた身体の瀕死体験を抑圧することもできるようになる。

したがって、「縁」に立つことで、自分の傷ついた身体を語ることができ、自己の中の自己の存在を認め、同時に存在していることができるようになる。すなわち、慢性痛の患者である「語り手」が自分自身を一つの物語として語り始める時、自己主体意識が身体と精神の「縁」に存在し、そこから解放しようとする。ここから考えると、慢性痛の患者である「語り手」が、その経験を語り直すことで、身体を対象化することができ、自分自身を改めて作り直すこともできるようになる。

自身のがん経験者であった A. Frank (2002) では、「病いの物語は身体によって語られる。その身体が、それ自体において生きている証言である。その証言の力は証人が自らを証言するものとして存在しているという点に求められる」(p.196)と述べている。

筆者のような瀕死体験を抑圧することもできるようになるのは身体をめぐる語りを通して、慢性痛の患者であることの新たな自己のあり方を認識することができるからである。

慢性痛という痛みを抱える身体を対象化するには内部から崩されてしまった自己（代表化されない自己）は今持病を持っている慢性痛の身体（代表化される自

己）が抑圧されているにもかかわらず、このような複数の自己を持つ身体は言語化することで、つまり、自分自身が生きる道を証言するように、生と死の「縁」に存在する身体を言語化しなければならない。すなわち、単なる、「身体-病い」と言う二元世界を意識するだけでなく、慢性病的身体からメタレベル的に語ることなのである。

このような「傷ついた語り手」は「縁」に生きることを認識することで、慢性痛の身体と距離を取るようになり、反省的に把握できるようになる。また、「傷ついた語り手」は内部から崩されてしまった自己の存在を通して自分自身の身体を対象化していると同時に対象化される身体（精神）を抑圧し、語れるようになるのである。

4. 「傷ついた語り手」の世界から学習者の「縁意識」へ

4.1 「傷ついた語り手」概念がもたらす、新しい文学の授業の可能性

学習者が「縁」に在ることを認識することは、文学教育にとって価値がある。なぜなら、医学用語である慢性痛とは違い、小説の「慢性痛」は人間社会の「慢性痛」である。「傷ついた語り手」の精神状態を通して、学習者を複数の自己として捉える。また、複数の自己の抑圧によって、他者との関係において生きづらさは痛みと向き合うことを通して、人生をよりよく生きていこうとすることを可能にしてくれると考えている。

例えば『おにたのぼうし』の場合、「おにた」は自分が鬼としてのアイデンティティを持っているけれども、鬼の世界に戻れず、「女の子」の前にも出せなくて、「黒い豆」になって自分が鬼である身を抑圧して永遠に消えたことは、「おにた」が深く傷ついていることを表している。そしてそれを語る語り手も傷ついているのである。

慢性痛の患者は、正常の世界で生きていくために、薬を使わなければならない。薬を使っている自己はもう「本来の自己」ではなくなる。正常の世界で現れる姿は「本来の自己」のアイデンティティではなく、薬で生きている自己でなければいけない。「おにた」はまさに慢性痛の患者のように、「本来の自己」=「角を持つ自己」のアイデンティティをぼうしで隠し、人間の世界=正常の世界に生きていこうとしたのである。しかし、「おにた」はそれすら叶わなかった。

田中(2001)は「おにた」の「ぼうし」について「「おにた」は「つのかくし」のぼうし=「おにたのぼうし」によって自分の存在を隠蔽し、内部の矛盾を放置した

まま、女の子に理解してもらおうとしたのであり、現実との相剋なして、一挙に己の夢の方に殉じてしまったのである。」(pp.19-20)と述べている。

しかし、筆者は、「おにた」はほうしで隠している内部の矛盾とは、慢性痛患者のような痛みのようなものであるととらえる。「放置」ではなく、そうせざるを得ない中を生きているのである。「おにた」は「縁」に存在することをはっきりと意識する「縁意識」を持っていたのである。

「女の子がはしを持ったまま、ふっと何か考え込んでいます。「どうしたの？」おにたが心配になってきくと、「もう、みんな、豆まきすんだかな、と思ったの。」と答えました。「あたしも、豆まき、したいなあ。」「なんだって？」おにたはとびあがりました。「だって、おにが来れば、きっと、お母さんの病気が悪くないわ。」おにたは、手をだらんとさげて、ふるふるっと、悲しそうに身ぶるいして言いました。「おにだって、いろいろあるのに。おにだって……。」(p.117)

語り手の「心配になってきく」という語りは、「おにた」自身が境界「縁」にいることをはっきり意識しはじめたことを表している。「おにた」は、本来の鬼世界から逃げ出して、鬼の世界と距離を置こうとしてきた。しかしながら、人間社会の文化共同体からの、鬼退治という排除によって、さらに痛みを抱えることになる。そのことによって、鬼たるものの象徴としての角を隠蔽し、自分自身を否定し消えてしまった。

内部から崩してしまった「おにた」はかつて「角を持つ」、「気のいいおに」だが、常には、鬼退治と言う意識がない。しかし、痛み(人間社会が鬼への差別)を持って、初めて意識するようになる。しかし、すでに死んでいる自己なのである。

従って、語り手が「おにた」が「心配になってきく」や「ふるふるっと、悲しそうに身ぶるいして言いました。」は、語り手が「おにた」の傷ついた心を読者に表すための表現なのであった。

ここまでの分析をまとめて見ると、慢性痛患者のような痛みを抱えている「おにた」の内部には、ほうしで生きている現実的な自己とほうし無しで死んでいる自己が現れる。この二つの自己は同じ慢性痛の痛みを抱えている「おにた」の身である。

また、「おにた」は痛みを抱える身体を対象化することができるのは(痛みを抱えていない自己)という内部から崩されてしまった自己(代表化されない自己)の存在を意識した上で、今、痛みを持っている身体(代表化される自己)が抑圧されていたことの意識ができ

たときである。しかしその瞬間に「おにた」は消えたのである。

「おにた」は、身体を言語化することができず、生きることを自ら抑圧して放棄してしまったのである。しかしながら、語り手は、このような「おにた」のことを代弁することで、「おにた」が生きたことの証言をするのである

ここで、消えた「おにた」は「混沌の語り」に生きている姿が見られるが、語り手は「混沌」に生きる「おにた」を代弁することで、消えた「おにた」の生を「探宄の語り」に生きていくと考える。すなわち、語り手は慢性痛の患者である「おにた」が自分自身を一つの物語として代弁する時、「おにた」の自分自身が生きる道を証言するように、自己主体意識が身体と精神の「縁」に存在し、そこから解放しようとするのである。

それゆえ、「おにたにとってのほうし」においては、なぜ、「おにた」は人間の世界に来るのか、もしかしたら鬼の世界では生きていられないのかと言う課題を浮かび上がらせてくる。このことがまさに、「おにた」の精神状態に鋭くぶつかることと考える。ここで、語り手の語りのみならず、語り手自身の語る行為そのものに着目しようとしている問題意識が大事であると考える。なぜ語り手が語りたいのか、なぜ、語りが生まれるのかについて明らかにしないと、テキストに向き合う読者としての学習者は、どのように語り手と向き合うのか、どのように当事者性を背負うべきか、と言う課題は明解にならない。だからこそ、本論で提示する「傷ついた語り手」という概念を今の文学教育に応用する価値は極めて大きいと考える。

4.2 文学の授業において、学習者がどのような「在り方」をすることが重要か

「傷ついた語り手」を扱うことで、語り手が語ることやその語りを聞くことで、学習者が自分自身の「縁意識」に気付き、対象化できると考える。つまり、身体を通じた学習になると言えよう。

山中(2016)は『おにたのほうし』の教材価値は「おにた」の「断絶」を通して現れる。山中は「断絶」を①まこと君の家→「断絶」と緩やかに付き合ってきた「おにた」②女の子との出会い→「断絶」と付き合う処世術を解く「おにた」③消える「おにた」→決定的な「断絶」との遭遇と、自己の破綻。(p.55)と言う三つのプロットに分類され、「授業では、この認識の落差を十分に体感させたい」とし、山中実践は「おにた」の「断絶」を通して、「学習者の「いのち」の問題への接続を求めてくる」を提示し、学習者自身の各々の「小さな物語」への響き合わせることができると言う教材

観であった。

「なぜ、『おにたのぼうし』なのか」と言う発問を起点として次のように児童の読みを交流した。

「S児・おにたが必要なぼうしを最後に手放したって、そういう物語…」

R児・体の一部って言いたいのですか？

S児・うん。そう。

I児・S児が言っていたように、付き添いみたいって言ってたじゃん。(中略 筆者)

R児・それが無いと生きられない。

S児・そもそもこれって、それがなかったら、女の子と出会ってなかったのだと思う。本当の意味では……本当の意味って考えると、本当に心が通じ合ったのかっていう意味だよ。おにたはまだ、自分が鬼ってことを隠しているわけだから、本当に繋がっていないだよ。私が書いた通り、もう帽子はいらなくて言うのをわからない人はいますか。説明したいと思います。もしもおにたは豆に変わっちゃったときも、きつとおにたは違うところでも生きていると思うんだよ。

R児・天国？

S児・うん。まあ、天国でも人いるじゃん。人の前でも、ちゃんと帽子なんかいらなくて、って、女の子には、その帽子なんかなくても、優しくできるよって……」(pp.61-62)

このように、山中の実践は、「断絶」を見据えることによって、S児が「そこに自身の「生き方」を投影しているからであろう」と指摘した。互いに了解し合えない「他者性」は「おにた」の「断絶」を通して、学習者の読みの変容が見られたが、さらにS児のような生徒の発言が生まれていた。この発言は「もう帽子はいらなくて」という指摘であり、生徒の発言は、まさに、『おにたのぼうし』と言う作品の「おにた」の精神状態に気づいたのである。

しかしそれは、「おにた」が「断絶」に生きることではない。おそらく山中実践は、「断絶」を語り手の語る行為に反映されるのではないだろうか。しかしそうであれば、なぜ語り手は「おにた」の「断絶」と言う「他者性」を見せてくれるのかと言う疑問が浮かび上がってくる。

山中の実践では、S児の発言から考えると、「おにた」にとってのぼうしは脱いでしまえば、良いではないかと思われる。しかしながら、死ぬまで永遠に脱げない。なぜ脱げないかと言うと、それは、鬼の世界ではぼうしをかぶっていないが、「おにた」は生きられないか

らと考える。言い換えると、鬼が角あるままで、ぼうしをかぶっていないと常に死んでいる「おにた」の姿が捉えられる。

従って、S児のような学習者の読みを教室はどのように受け止めるべきかということについて、検討される必要がある。この生徒の発言に対して、筆者は本論を踏まえ次のように解釈する。生徒たちが語り手の気持ちできるだけありありと想像しながら聴くことの授業が期待される。また、生徒たちの「傾聴の力」が養われると考える。そこで、「おにた」の苦しみを共感的に理解する営みの土台となる文学教室となると考える。

抑圧されていることによって生き、しかも、抑圧されているそのことも抑圧して生きていながらそこから解放されるために永遠に語り続ける「傷ついた語り手」の語りには、学習者が耳を傾ける。それは永遠に終わることがない、カウンセリングのようである。

すなわち、『おにたのぼうし』の語り手がどうしてそのように語るのか、なぜそのように語らされているのか、ということに耳を傾けることで、学習者は『おにたのぼうし』の世界を他人事としてではなく、体験することができるという「傾聴」しあう関係が築かれる文学の授業において、学習者を「当事者」にすることができるのである。

それゆえ教師は、ケアする側として、学習者の発達段階、心理、生物学的な変化にとって中心的な役割を果たすものとする。

このように、学習者は、文学教材である「傷ついた語り手」の精神状態に注目し、物語世界と現実世界との間の「縁」にいることを認識するだけでなく、学習者自分自身の複数の自己「代表化されない自己」が存在することを認識し、自分自身の主体はその複数の自己の「縁」にたつことも認識していく。

これを踏まえると、山中実践のS児のような学習者が「傷ついた語り手」を認識し、語り手は自己に向かって語っていることを認識した上で、よいカウンセラーになり、よい聞き手になり、「傷ついた語り手」を聞いてあげると言うような姿勢を持つことができるような、授業実践の開発を行うと言う方向性が見えてくる。

本論で提示した「傷ついた語り手」と言う概念は、小学校の教材である『おにたのぼうし』だけでなく、『鏡』、『故郷』、『山月記』などの文学教材の授業において、学習者が刺激され、語り手の問題を自分自身の問題として捉えられることを示している。

また、「傷ついた語り手」の概念で、文学研究と文学教育において、語り手の一人称と三人称の原理を問

い直せることができる。なぜかという、「鏡」のような一人称の場合は、傷ついていることは、聞き手が存在しないから、永遠に語り続けることができる。一方で、三人称の語り手は何のために、語っているのか、そもそも、どうして語るのか、それは、ある状況の中で、三人称の語りが生まれる。つまり、三人称の語りは第三者の感性的に傷ついているから、三人称の語りが生まれるのではないかと考える。

とはいえ、本論が焦点を当てる「傷ついた語り手」によって引き裂かれたその所為としての「語り」の問題は、必ずしも文学作品における人称の問題とは限らない。

なぜならば、「傷ついた語り手」が語り出そうとする時に、その自分の傷つきを癒すとか、取り戻すとか、回復することも色々な文学教材によっての現れ方が違うからである。そうすると、この作品は自分の傷ついた語りをどう向き合っているのか、この語り手は傷ついた自分というものを語ることで、「本来の自己」を取り戻そうとしつつ、取り戻せないという葛藤を語り続けると考える。

一方で、文学教材によっては、「傷ついた語り手」の語りも色々なバージョンがある。ここで、学習者は、「傷ついた語り手」の語りとどう向き合っているのかという教材論としては大事になってくると考えるからである。

さらに、このような「傷ついた語り手」の語りがある作品は文学教材としてふさわしいというような価値も見られる。つまり、「傷ついた語り手」は今日問われている文学テキストを教室で読む意味、あるいは、文学教育の意味をめぐる議論を進めていく上で、最もクリティカルな領域に属していると考えられ、物語ることが、その語り主体としての「語り手」にとって、生きるための、死を直視したものとしての持続する痛みとしての、マージナルな自己と向き合ったものとしての意味を持つと考えるからである。

5. 本研究の成果と課題

新型コロナウイルスの流行は、現在に至るまで様々な問題を顕在化させている。病は人類の進化とともにあった。病いは「敵」だけではなく、痛みを通して、自らの生と死を再確認させ、人間社会を見直すことができる。この点をふまえれば、「傷ついた語り手」の概念は極重要である。

本研究は文学と教育の研究だけでなく、精神学、心理学、言語学などの研究を融合する研究と考える。つまり、心理的療法にも役に立つと考える。心理的なト

ラウマや痛み（例えば、原爆被害など）を抱える人は痛みを物語へと転じることによって、運命を経験へと変換することができる。

文学教育では、縁人間である語り手は抑圧されていることによって、生きていく、しかも、自己が抑圧されていることを意識し、抑圧されているそのことを現実の自己で抑圧して生きていく主人公になる小説を読むことで生徒たちも揺さぶられるのではないかと考える。一方で、学習者は「傷ついた語り手」を認識し、語り手は自己に向かって語っていることを認識した上で、よいカウンセラーになり、よい聞き手になり、「傷ついた語り手」を聞いてあげるとするような姿勢を持つ学習者も期待されている。

5.1 本研究の成果について

- ① 「縁意識」と「傷ついた語り手」の精神構造を明らかにし、新たな文学教育の学びの可能性を示唆した。
- ② 「傷ついた語り手」概念を育てることにより、学習者にとって「縁意識」の存在はより切実に訴えかけてくるものとなる。「縁意識」に触れることによって学習者が刺激され、語り手の問題を自分自身の問題として捉えられることと「自己内自己」という複数の自己の存在と向き合うことができるようになる

5.2 本研究の課題について

「傷ついた語り手」は文学教材の語り手という特定だけではなく、人の存在、人が語る行為に繋がってくる。だが、傷ついているものは、見えやすい部分があるし、見えにくい部分もあるゆえに、特定の「語り手」に限らず、人が生きることである以上に、普遍的な話になるからである。より重要なのは、「傷ついた語り手」の語りは傷つきとどう向き合わせるのか、その、向き合い方も様々あると考え、文学教材の個性、あるいは、語りの個性、つまり、様々な個性を持つバージョンを持った語りに、学習者はどのように読み解かせるのか、そうすると、読み取れやすいものと出合わせやすいものもある。出合わせにくいものを出合わせていくことについては、今後の課題としたい。

【注】

- ¹ 田中実 (2021) 「この作品の〈語り手〉の「私」は自身も無意識の闇を抱え、自分の目に見え、耳で聞き取る相手、対象人物である関土や楊おぼさんの内面も見えていません。横並びにしに登場することは

できません。これにたいして、作品全体の言葉を統括しているのがこの〈語り手〉の「私」を「私」と対象化して語る〈機能としての語り手〉です(82-83)。

- ² Frank, A. (1995) *The wounded storyteller: Body, illness, and ethics*, Chicago: University of Chicago Press. (= 鈴木智之訳 (2002) 『傷ついた物語の語り手：身体・病い・論理』 ゆみ出版)

【引用文献】

- 河野哲也 (2014) 『境界の現象学 始原の海から流体の存在論へ』 筑摩選書
- あまんきみこ 『おにたのぼうし』 ひろがる言葉小学校 国語三年下 教育出版
- 住田勝他 (2001) 「文学作品を読む能力の発達に関する研究—〈つづき物語〉の量的分析を中心として—」 『国語科教育』 第49集, 全国大学国語教育学会, 57-64
- 田中実 (2001) 「メタプロットを探る「読み方・読まれ方」—『おにたのぼうし』を『ごんぎつね』と対照しながら—」 『文学の力×教材の力 小学校編3年』 8-22 教育出版
- 田中実 (2018) 「〈近代小説〉の神髄は不条理, 概念としての〈第三項〉がこれを拓く: 鷗外初期三部作を例にして」 『日本文学』 67巻, 日本文学協会, 2-17
- 田中実・須貝千里・難波博孝 (2018) 『21世紀に生きる読者を育てる 第三項理論が拓く文学研究/文学教育高等学校』 明治図書
- 難波博孝・三原市立三原小学校 (2007) 『国語科授業改革双書No.2 PISA型読解力にも対応できる文学体験と対話による国語科授業づくり』 明治図書出版
- 難波博孝 (1999) 「漸近線としての日本語・国語科—「分裂した自己を統合する企て」への拒否」 『日本文学』 48巻, 日本文学協会, 64-73
- 難波博孝 (2008) 『母語教育という思想—国語科解体/再構築に向けて—』 世界思想社
- 正木遥香 (2020) 『「痛み」をめぐる物語論の再検討』 中国四国教育学会第72回大会発表資料
- 森美智代 (2013) 「文学体験に関する理論的検討: ルソーによる「解釈から証言へ」の移行に着目して」 『国語教育思想研究』 第7号, 国語教育思想研究会, 42-50
- 山中勇夫 (2016) 「あまんきみこ『おにたのぼうし』の教材価値と授業実践—「断絶」を見据えて—」 『日本文学』 65巻, 日本文学協会, 51-63
- 山元隆春・住田勝 (1996) 「文学作品に対する子ども反応の発達—「おにたのぼうし」の場合—」 『国語科教育』 第43集, 全国大学国語教育学会, 60-69
- 雷民激 (2019) 「緑・意識の世界観—日中の『故郷』の作品観を通して—」 『国語教育思想研究』 第19号, 国語教育思想研究会, 19-28
- 雷民激 (2020) 「存在論の哲学論と認識論の文学理論から考える文学教育 第三項理論から「緑」世界観へ」 『国語教育思想研究』 第20号, 国語教育思想研究会, 65-76
- 雷民激 (2021) 「傷ついた語り手」第141回全国大学国語教育学会世田谷大会自由研究発表 (G会場)
- 雷民激 (2022) 「緑意識の世界観から考える傷ついた語り手—「おにたのぼうし」を通して—」 初等カリキュラム学会第6回大会口頭発表
- 雷民激 (2022) 「緑意識の世界観から考える文学教育—慢性痛を抱えた「傷ついた語り手」を通して—」 『国語教育思想研究』 第25号, 国語教育思想研究会, 15-23
- フランク, アーサー・W. 鈴木智之訳 (2002) 『傷ついた物語の語り手：身体・病い・論理』 ゆみ出版
- 鄭家建 (2000) 「魯迅：縁の世界」 『魯迅研究月刊』 第11期, 30-42

(主指導教員 難波博孝)